世界文化遺産富士山と構成資産

2013年に富士山は「信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録されており、2023年は登録10周年を迎えます。

構成資産には以下のものが含まれています。

富士山域（山頂の信仰遺跡群、大宮・村山口登山道、須山口登山道、須走口登山道、吉田口登山道、北口本宮冨士浅間神社、西湖、精進湖、本栖湖）、富士山本宮浅間大社、山宮浅間神社、村山浅間神社、須山浅間神社、冨士浅間神社(須走浅間神社)、河口浅間神社、冨士御室浅間神社、御師住宅(旧外川家住宅)、御師住宅(小佐野家住宅)、山中湖、河口湖、忍野八海(出口池)、忍野八海(お釜池)、忍野八海(底抜池)、忍野八海(銚子池)、忍野八海(湧池)、忍野八海(濁池)、忍野八海(鏡池)、忍野八海(菖蒲池)、船津胎内樹型、吉田胎内樹型、人穴富士講遺跡、白糸ノ滝、三保松原

富士山は、標高 3,776mの極めて秀麗な山容を持つ円錐成層火山で、南面の裾野は駿河湾の海浜にまで及び、山体の海面からの実質的な高さは世界的にも有数です。古くから噴火を繰り返したことから、霊山として多くの人々に畏敬(いけい)され、日本を代表し象徴する「名山」として親しまれてきました。山を遙拝(すうはい)する山麓に社殿が建てられ、後に富士山本宮(ほんぐう)浅間大社や北口本宮浅間神社が成立しました。平安時代から中世にかけては修験(しゅげん)の道場として繁栄したが、近世には江戸とその近郊に富士講が組織され、多くの民衆が富士禅定(ぜんじょう) を目的として大規模な登拝(とうはい)活動を展開しました。

このような日本独特の山岳民衆信仰に基づく登山の様式は現在でも命脈を保っており、特に夏季を中心として訪れる多くの登山客とともに、富士登山の特徴をなしています。また、『一遍聖絵(いっぺんひじりえ)』をはじめ、葛飾北斎による『富嶽三十六景』などの多くの絵画作品に描かれたほか、『万葉集』や『古今和歌集』などにも富士山を詠(うた)った多くの和歌が残されています。このように、富士山は一国の文化の基層を成す「名山」として世界的に著名であり、日本の最高峰を誇る秀麗な成層火山であるのみならず、信仰の対象と芸術の源泉として、また、文学の諸活動に関連する文化的景観として世界的な意義を持つことから、顕著な普遍的価値を持つと評価されました。

【編集・発行】 裾野市文化財保護審議会・裾野市教育委員会生涯学習課
裾野市深良 435 番地　TEL055-994-0145　FAX055-992-4047

当パンフレットは、裾野市公式ウェブサイトでも公開しています。

▲ウェブサイト

楽しい郷土史だより　第11号

令和５年３月　裾野市文化財保護審議会・裾野市教育委員会生涯学習課

須山浅間神社社殿

石灯篭(いしどうろう)の猪目(いのめ)（ハート小窓）

須山浅間神社

まだ富士山の火山活動が活発だった頃、人々は噴火する山の事を浅間(あさま)の山と呼んでいて、そのアサマ山の神が怒っているから噴火するのだと信じられていました。

その中でも富士山は3000mを超す山で遠くからでも見えるため、その噴火は特に恐れられ、浅間の山の神の怒りを鎮(しず)めるために、富士山の見える場所にお社(やしろ) を建て、浅間の大神(おおかみ) を御神体(ごしんたい)として、その怒りが鎮まるように仰(あお)ぎ奉(たてまつ)ったのが、浅間神社の始まりと言われています。全国には1300社ほどの浅間神社があり、そのうち静岡県には現在106社の浅間神社が確認されています。

富士山世界文化遺産の25の構成資産の中には、浅間神社が8社含まれていて、その中の一つが須山浅間神社です。須山浅間神社は、慶長(けいちょう) 3年（1598年）の社殿旧記（神社の古い言い伝え）によりますと、景行(けいぎょう)天皇（西暦110年）の時代に、皇子(みこ)日本武尊(やまとたける)が蝦夷(えぞ)征伐(せいばつ)の時にこの地を訪れ、富士山を拝(おが)んで浅間神社を創起(そうき)したと伝えられています。

そして、欽明天皇(きんめいてんのう)在位13年（552年）の時代に曽我稲目(そがのいなめ)という人が再興したとされています。

いずれにしましても、古くから山岳信仰として、富士山を御神体(ごしんたい)と仰ぎ、当時の度重なる噴火とも関連して、山麓に浅間神社を祀(まつ)り、岳神(がくしん)、つまり浅間の大神(おおかみ) を 慰(なぐさ) め祀(まつ)ったのが始まりと言われています。

また、須山浅間神社はこうした経緯から、富士山に登る登山道の起点としても発展してきました。

富士山須山口登山道の歴史

富士山の須山口登山道は、文明18年（1486年）に書かれた旅行記「廻国雑記」の中に記録されています。この廻国雑記は、京都聖護院の道興法親王という御坊様が、1486年に京都から新潟（越後）、長野（信濃）を回り江戸に出る旅をし、その旅の間の色々な経験をたくさんの歌に詠んだ旅行記で、江戸から箱根を越えて三島から須山に立ち寄り、須山口から富士山を眺めたと書かれています。その時に道興が感激して詠んだ歌が、後に須山浅間神社の入口に建てられている石碑に彫られています。その歌は、

「よそにみし　富士の白雪けう分けぬ
心の道を神にまかせて」

という歌です。この廻国雑記により、1486年室町時代には、すでに須山口という登山道があった事が分かります。その当時の須山口登山道は下図のとおり頂上の銀名水のところに到達していました。

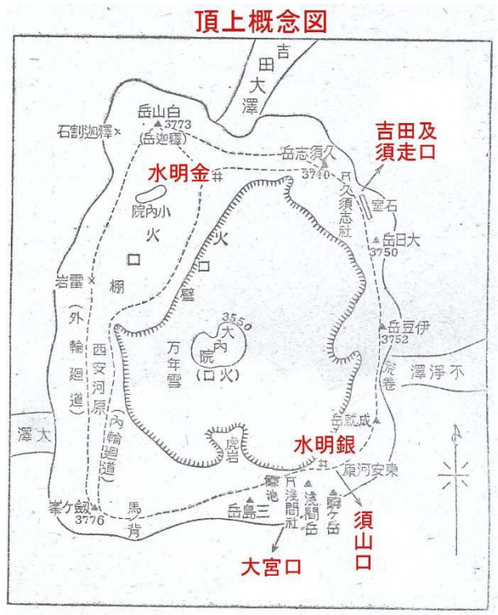
銀名水とは、当時頂上には水が湧き出ているところが二か所ありまして、その山梨県側の湧水を金名水、静岡県側の湧水を銀名水と呼んでいました。残念ながら現在は水が湧き出る事はなく、名前だけが残っています。

その当時の登山道は、大宮口（今の富士宮口）と、須山口、そして吉田口の3本です。現在でも頂上に到達している登山道はこの3本しかなく、他の登山道は8合目や7合目、あるいは5合目などのどこかで、この3本の登山道に合流しています。

この須山口登山道は他の登山道とともに、富士山を信仰する「富士講」の人々に利用されて、江戸時代大変にぎわったと記録が残っています。また富士講の登山者のお世話をする、御師と言われる家も須山には12軒あったと記録が残っています。

しかし、この須山口登山道を大きな悲劇が襲います。宝永4年（1707年）に大きな噴火が、ちょうどこの須山口登山道の途中に発生します。この噴火は旧暦の11月23日、午前10時頃おこりました。この噴火によって、須山口登山道が吹き飛んでしまいました。

それから約70年間、須山口登山道は世の中から忘れられてしまいます。しかし1780年、地元の人々の熱い思この復活したルートは、江戸時代につくられた署繪図からも確認できます。またこの図には、御師の家に囲まれた浅間神社と、浅間神社からの登山道が描かれています。署繪図には、一合目役場と書かれた場所がありますが、ここが現在の一合目須山御胎内の場所です。この当時の須山口登山道は南口登山道とも呼ばれていました。



この一合目の役場では、近年話題になりました入山料を頂いていました。当時は入山料ではなく山役銭と呼ばれていました。平成25年に御師をやっていた須山の渡辺家の収蔵品から、この山役銭の領収書ともいうべき山切手が発見されました。この山切手を見ますと、一例ですが登山者9人、うち一人先達と読めるものがあります、これは9人のグループで、その中に一人、先達と言われるベテランのガイド役がついている、ということになります。また発行元が南口役所となっています

御縁年の年

富士山が誕生したのが　庚申　の年と言われていまして、60年ごとにめぐってくる庚申の年の事です。今でも暦の上で生まれた年の干支が、一回りして戻ってくる60歳の誕生日を還暦と呼んでお祝いしたりしますね。

このような事から、当時の富士講を中心とした人々は、この年に富士山に登ると、御利益が何十倍にもなると信じていました。ですから、この御縁年の年には、富士山に登る人が大変多かったようです。またこの寛政12年、1800年の年は、1780年に須山口が復活してから初めての御縁年の年にあたる事から、須山の御師を中心とする関係者が、登山者を集めるために、様々な行事を行った記録が残されており、この年には5398人の登山者があったと記録されています。

案内看板（複製）

また、各街道筋には須山口登山道を案内する、この右上写真のように大きな立て看板も立てられていました。

時代は明治に代わり、再び須山口登山道は世の中から忘れられてしまう運命に襲われます。それは右の絵のように、明治16年（1883年）に須山口の2合8勺のところに、御殿場からの登山道が開発されたことから始まります。その後、明治22年に東海道線が開通し御殿場駅が出来ます。このことによって、登山者の大半が交通の便利な御殿場から登る様になります。さらに明治45年には、右の絵の須山口登山道の一部が、当時の陸軍の演習地として接収 され、須山口登山道は通行できなくなりました。こうした出来事から、須山口登山道は再び世の中から忘れられてしまう、まぼろしの登山道となってしまいました。

平成8年、須山の有志の方々が登山道を復活させようと、須山口登山道保存会を結成し、平成9年に、現在の東富士演習場を通らないもっとも古いルートで登山道を復活させ、須山口登山歩道と名づけました。

このような歴史が認められ、平成25年の富士山世界文化遺産の登録では、須山御胎内から幕岩までと、御殿場からの登山道がつながっている2合8勺から頂上までが、須山口登山道として、須山浅間神社の社叢や境内とともに、富士山世界文化遺産の構成資産に登録されました。

※年号　西暦